

あとがき

小林正人の絵を見る人は、彼が描けないのだと思うだろう。あるいはためらいながら描いているのだと思うだろう。なにしろ何が描いてあるのかわからないのでそれはもったもな事だ。だが、結論を出す前にもうしばらく画面に向かっていると、そのかすかな筆跡は必ずしも曖昧なものではないこと、少なくともこれはためらいによって生じたものではないことに気づくだろう。はじめはとっかかりを捜して画面の中をさまよっていた視線は、いつのまにか絵全体をしっかりと把握しつつある。そしてひとたび見る目が定まるとそこからほはや揺らぐことはない。なぜならその絵はそのように見えるように出来ているからだ。彼の作品は見た目よりもあらゆる点で何かはずっとはつきりしたものなのだ。そこで人は考える。彼は描けないのに描こうとしているのか。それとも描けるのに描こうとしないのかと。

ところで、それぞれの絵にはいずれも題がついている。すべて具体的なものだ。それは風景としての空であったり、人物であったりする。今回並べられた作品もすべて具体的な題がついている。しかしその題から何がそこに描かれているかを了解するには依然として説明を必要とする。それとは別に、見る人にとってとりあえず明らかなことは、作品の大きさや形と色である。画家はそれらのことが描かれるモチーフと抜きがたい関係にあると考える。だからリンゴの絵を描くために正方形の大きいキャンバスを選んだというよりは、正方形の絵を描くためにリンゴを選んだということなのだ。そのリンゴを彼は大きなキャンバスの中央やや上に浮かばせた。誰もこれをリンゴだとは思わないが、リンゴのある静物画を今日描くとすればこうなるのだと彼は作品の中で主張している。そこで人がセザンヌのリンゴはもとより絵画史上の正方形の絵の数々を思い出したとしても不思議ではなく、実際のところそれらに対する明解な分析の上に彼の絵は成立している。

彼は描けないのに描こうとしているのではないし、描けるのに描こうとしないのでもない。そのように描かねばならないので描いているのだ。誰もこう描かないし、描けるとも描こうとも思ったことはない。それはあまりにきわどいが、充分にあらわれている。架空の、論理上のものでしかなかった絵画がいま目の前に現われたのだと解釈してもよい。そう考えれば彼の絵はけっしてむつかしい絵ではない。拒む理由は何もない。何人かの画家がそうであるように、彼もまた絵画の歴史的な遺産を総動員して次の絵画の生み出そうとする一人の芸術家なのだ。

最後に、素晴らしいテキストをお寄せ下さった市川さんに感謝と御礼の言葉を申し上げます。小林本人が私に教えてくれたことなのだが、テキストの各々の章が、小林の作品のモチーフにそれぞれ呼応することに気づいたとき、このテキストの素晴らしさを改めて確認させられたのである。すなわち一章は「空」、二章は「天使」または「天窓」あるいは「木」、三章は「構図法」、四章は「画室」というように。

1988年12月

佐谷画廊

佐谷周吾